

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2010年10月7日放送

第109回日本皮膚科学会総会①

「進化する皮膚科学2010～学会を終えて」

大阪大学大学院 皮膚科教授
片山一朗

はじめに

2010年度の第109回日本皮膚科学会を4月16～18日の3日間にわたり、大阪国際会議場を中心にして開催させて頂きました。会期中5,000人を超す方の参加があり、大変な盛況であったことに御礼を申し上げるとともに、この場を借りて今回の総会のプログラム内容、論点や話題、会員の声などを紹介させて頂きたいと思います。

進化する皮膚科学

日本皮膚科学会総会は今回が109回目の開催という、我が国で最も古く組織化された大変歴史のある学術大会で、近年参加者も増加の一途を辿っております。来年度からは東京と京都の交互開催となる予定で、暫く大阪での総会はなく、その意味でも我々にとって、感慨深い学会となりました。

総会のメインテーマは「進化する皮膚科学」-21世紀の医療・社会の中での役割と展望-とし、総会キャラクターとしてはブラックジャックを使用させて頂きました。ポスター、記念品、ホームページなど総会の広報に大いに役立ち、会員にも好評であり、手塚プロのホームページにも掲載されました。

学術大会は今回の総会テーマにのっとり、初日のオープニングとして、特別セッション「未来皮膚科学」で開始させて頂きました。初日の午前にもかかわらず、

進化する皮膚科学-2010-

-21世紀の医療・社会の中での役割と展望-



420 人も先生の参加があったと聞いております。慶応大学の久保亮治先生、大阪大学の玉井克人先生、京都大学の梶島健二先生そして高知大学の佐野榮紀先生という、それぞれの世代を代表する 4 人の先生に 21 世紀の皮膚科学に対する熱い思いを語って頂き、本総会の白眉だったと多くの先生から評価して頂いたことは企画者として嬉しく思います。久保先生は日本皮膚科学会の最も荣誉ある本年度の皆見賞を受賞され、初日の午後の受賞講演でその詳細を講演されました。

教育講演・記念国際講座・特別講演

正午からはスポンサーセミナーと教育講演をドッキングさせた新しい試みのプログラムが開始されました。5つのセミナー全てで、世界を代表する海外からのゲストにキーノートレクチャーを講演して頂き、その後新進気鋭の先生方に登壇頂きましたが、どの会場も人で溢れ、大変な活況ぶりでした。午後は土肥記念国際講座として英国 St. Thomas Hospital の John A McGrath 教授に「Gene hunting for inherited disorders」という演題名で角化異常症や Lipoid proteinosis などの遺伝性疾患の最新の研究成果を講演頂き、世界トップレベルの研究の一端を紹介して頂きました。私が座長を務めた特別講演の大阪大学遺伝子治療学講座の金田安史教授による「遺伝子治療の過去・現在・未来」では遺伝子治療の世界的な流れを紹介して頂き、現在我々の教室と共同で行っている仙台ウイルスエンベロップを用いた進行期悪性黒色腫の治療戦略を熱く語って頂きましたが、会員一同その成果が聞かれる日を待ち望む次第です。

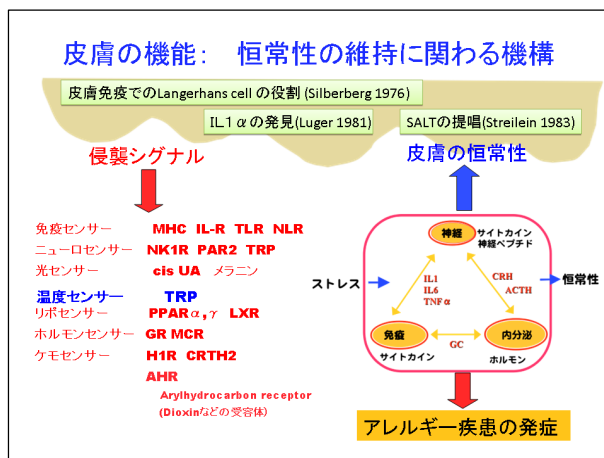
会頭講演

2 日目午後は私が「進化する皮膚科学-2010」と題した会頭講演を行い、大阪大学で現在行われている、臨床、基礎研究を紹介させて頂きました。私自身は皮膚の免疫学の研究が現在までの臨床あるいは基礎研究の仕事のルーツになっております。その中で今最も興味を持っているテーマは皮膚の恒常性の維持機構に関するものです。皮膚は



病原微生物や化学物質などの異物のみでなく、紫外線や温度、ストレス物質などに対しても精密なセンサー機能を持ち、環境や精神活動の変化に柔軟に対応することが分かってきました。このような生体の防御システムが作働する過程で、皮膚は様々な生体活性物質を産生し、恒常性を維持するような生体反応が進行すると考えられています。

す。Streileinにより提唱された皮膚に存在する精密な免疫防御システムを SALT (Skin associated lymphoid tissue) とよびますが、現在ではこのような、免疫システムにくわえ、さらに神経系や内分泌系に関与する様々な分子がケラチノサイトからも産生されることが明らかとなり、皮膚という末梢組織でもこれらのシステムが精緻なクロストークを営み、その機能異常が多様な皮膚疾患をおこすのではないかということが分かってきました。



現代を生きる我々皮膚科医の重要な役割として、有効な治療法のない皮膚に現れる難治性疾患の治療薬を創出することがあります。我々はブレオマイシンを経皮的に投与することにより、強皮症に類似した皮膚の硬化や繊維化病変と自己抗体が出現すること、さらに TNF レセプターp55 のノックアウトマウスではこの変化がより早期に見られ、MMP1 の誘導低下が皮膚硬化に関与することを報告してきました。この過程で強皮症の発症に IL6 が関与する可能性が明らかとなり、大阪大学前総長の岸本忠三先生の開発された抗 IL6 受容体抗体の効果を先のブレオマイシンモデル、強皮症患者さんで検討させて頂いています。現在東京医科歯科大学で横関教授により検討されているアトピー性皮膚炎に対する STAT6 デコイ療法、高知大学の佐野教授が検討されている STAT3 を標的とする分子設計薬など新たな治療薬が皮膚科医の手で創出される日も近いと考えます。また私自身若い頃、皮膚科医になる動機となったのが汎発性の白斑患者さんを治すことでしたが、ようやくその糸口となる現象を見いだすことができ、現在教室の先生方と治療薬への応用を検討しております。このように多くの先生方と一緒にまさに進化する皮膚科学の中で研究を続けられる喜びを心より感じた会長講演でした。



記念講演

記念講演では大阪大学医学部部長・研究科長であり、世界的にご高名な平野俊夫教授に「亜鉛と免疫・アレルギー炎症:亜鉛はシグナル伝達分子である」をお話頂きました。講演の最初のパートで平野教授は今年が緒方洪庵の生誕 200 年の記念すべき年である

こと、適塾の歴史などを貴重なスライドを使い、紹介されました。特に学会会場となった福島地区は大阪大学医学部が誕生した場所でもあり私自身大いに感銘を受けました。後半は現在最も力を入れられている亜鉛トランスポーターのお話をされ、全く新しい発想からの新たなアレルギー炎症制御のストラテジーを講演頂き、1500人近い多数の参加者に大きな感銘を与えて頂きました。もともと皮膚科を専門とする先生は研究的な思考の方が多く、先生方も興味を持って拝聴されたのではないかと考えます。

皮膚科学の進歩

次に近年の皮膚科学の進歩をプログラムから紹介させていただきます。

カリフォルニア大 San Diego 校の山崎研司先生には、「自然免疫と皮膚疾患」で、皮膚細胞が産生する生体抗生物質である抗菌ペプチドの新しい話題を取り上げて頂きました。痤瘡、膠原病、乾癬、アトピー性皮膚炎などの病態、発症との関わりが明らかにされてきており、今後の皮膚疾患治療に大きなインパクトを与えて頂いたかと思えます。またアトピー性皮膚炎のカルシニューリン阻害軟膏による Proactive 療法やシクロスポリンなどの新しい免疫抑制療法、自己免疫水疱症でのガンマグロブリン大量療法など、すでにその効果が検証されている新規治療法や表皮水疱症、皮膚の難治性潰瘍などの幹細胞を用いた新しい再生医療、悪性黒色腫でのワクチン療法など興味深い講演が目白押しで、豪華な料理を前にして、どこから手をつけていいか迷うほどの贅沢な悩みだったと、後日参加された先生からメールを頂きました。近年癌、膠原病などでの分子標的薬、バイオリジクスによる治療法が大きな成果を上げつつありますが、皮膚科領域でもその臨床応用が進行しており、乾癬、膠原病、皮膚悪性腫瘍などの難治性疾患での成果を講演頂いた会場は立ち見が出るほどの盛況であったそうです。

そのほかにも学校保健での皮膚科医の役割と問題点、今回初めての試みである女性医師支援を考えるワークショップ、勤務医・開業医を取り巻く諸問題などでも熱い討論が行われていました。特筆すべきは450人を越す最も参加者の多かったセッションの「軟膏療法の新しい視点」で、小生も拝聴しましたが、本来皮膚科医の一番大きな武器であった軟膏療法がマニュアル化しつつある現在、多くの皮膚科医が、もう一度原点に戻って皮膚科学を考えたいという気持ちの現れかと推察する次第です。

展示ブースでは機器や化粧品、診断薬など200近い出展があり、広い会場でゆったりと展示を楽しみながら、学会提供の大阪のスイーツの味を楽しんで頂きました。この企画は昨年古江会頭の博多のスイーツ提供に倣い、医局の先生方やスタッフの皆さんを選んで頂いたお菓子を提供させて頂きましたが、お陰様で大好評でした。

一般演題はすべてポスター発表で、堂島川を挟んだ旧大阪大学附属病院跡に建てられ

た堂島リバーフォーラムで行われました。熱心な討論があり、ポスター賞 21 名、会頭特別賞 3 名受賞者には懇親会の席で私が記念品と表彰状をお渡しいたしました。



スペシャリティナース講習会

スペシャリティナース講習会は褥瘡のケアや乾癬、アトピー性皮膚炎患者に対する軟膏療法など皮膚疾患に特化したナースの養成に協力する形で総会プログラムとは別枠で最終日の午後に開催され、262 名もの方に参加頂きました。今後このような講習会が継続されることで、よりよい皮膚科のチーム医療が提供できると考えます。学会保育所は過去最高の利用率であり、普段学会に参加が難しいママさん皮膚科医の先生方にも大阪の総会を楽しんで頂いたことと思います。

そのほか今回からの新しい試みとして、参加登録に自動受付器を導入したことや、ランチョンセミナーの申し込みに登録機器を用い、空席状況を随時会場内に設置したデジタルモニターで案内したことで、会員の先生方にも大変好評でした。また例年最終日午後は空席が目立つ会場が多かったのですが、プログラム編成や進行に少し工夫をこらしたことで、多くの先生方に参加して頂くことができました。会期中英国のヒースロー空港の閉鎖など欧州便のキャンセルが相次ぎましたが、幸い参加頂いた海外からの先生には無事帰国して頂くことができました。あらためて今回大阪の記念すべき総会に出席して頂いた先生方、企業、看護師の方々に感謝させて頂き、印象記とさせて頂きます。